

2006年度前期情報リテラシー実践Ⅰ授業評価報告

基礎教育センター・教授
永井 正洋

はじめに

高等学校では、現行の学習指導要領が平成11年に告示され、平成15年度より実施されてきた。大学等高等教育機関には、これに従い教育を受けた学生が平成18年4月に初めて入学した。この高等学校学習指導要領では、教科「情報」が置かれたことが1つの特徴となっているが、先行研究では、これにより、大学入学時の学生のコンピュータリテラシーが、向上していることが期待されてきた。例えば、鈴木（2003）は「今年度から高校で教科「情報」も始まり、ワードやエクセル、インターネットを利用できる学生が入学してくる平成18年度からは大学における情報教育も見直しをする必要がある」と述べている。また、片岡（2003）は、「・・・2006年度以降は、情報処理に関する基礎的な知識・技能の平均レベル向上が期待される・・・」と述べている。

この教科「情報」に対する漠然とした期待は、多くの大学の情報教育担当教員がもっていると推測されるが、実際、学生は十分な知識やスキルを身に付け入学してくるのであろうか。

そこで、大学で情報教育の授業を受ける学生のレディネスがどのような状態であるのかを明らかにするために2006年5月に質問紙調査を行った。結果として、先行研究で期待されている程、知識やスキルが定着していないと学生が認識していることが分かった。また、クラスター分析により、基本的な内容に指導の焦点を当て授業を行えば、学生のレディネスに合った教育が展開できるであろうということが分かった（永井ら 2005）。

ここで、本学での情報教育は1年次に「情報リテラシー実践Ⅰ」という科目を設けて行っているが、その内容は、情報倫理、本学でのコンピュータ環境、メール、Web検索、ワードプロセッサ、表計算ソフト、プレゼンテーションソフトなどに関しての講義と演習である。この内容は、これまで大学において基礎教養課程で一般的に行われてきたものであり、レディネス調査で明らかになった学生の状況とも合致するものである。ここで、授業後の評価によって、満足のいく結果が得られれば、この基礎・基本の重視という方向性はある程度保証されたといえる。

そこで、この授業に関して学期の終わりに学生による授業評価を行い、その結果から学生の満足度に影響を与



える変数を特定する。これによって、現行の情報教育が妥当なものであるかどうか明らかにすることを考えた。

目的

情報教育に関する学期後の学生による授業評価から、学生の意欲やコンピュータリテラシー、また教員の授業構成能力などの実態を明らかにし、学生の満足度に影響を与える変数を明らかにすると共に、行われている情報教育の評価を行う。

方法

質問紙を用いて、以下の様に授業評価を実施した。

授業評価

対象：首都大学東京 情報リテラシー実践Ⅰ受講者
人数：1382人（81.3%）

結果と考察

授業評価の結果から

図1は、本学で行われている情報教育の授業「情報リテラシー実践 I」の満足度を他の教科と比較したグラフである。これを見ると情報リテラシー実践 I が比較的高く評価されていることがわかる。

次に図2は、各質問項目とその回答状況を示したグラフである。これを見ると、MailやWeb検索そして、ワードプロセッサ、表計算、プレゼンテーションソフトの利用に関しては、何らか身に付いたと認識している学生が半数を超えていることが分かる。また、授業の難易度や目的が明確なこと、そして教材なども満足度が半数を超えていることが分かるが、教員の話し方や学生参加型の授業を構成したのかという点に関しては、やや低い評価になっている。

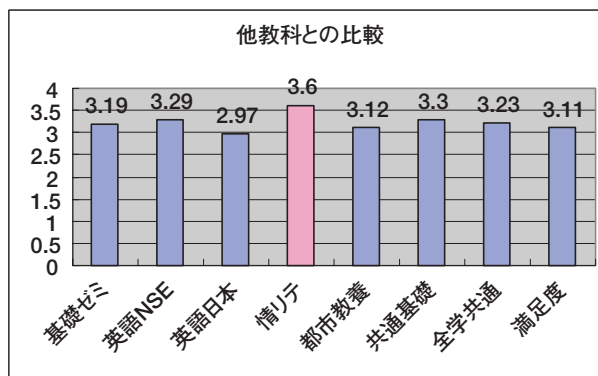


図1

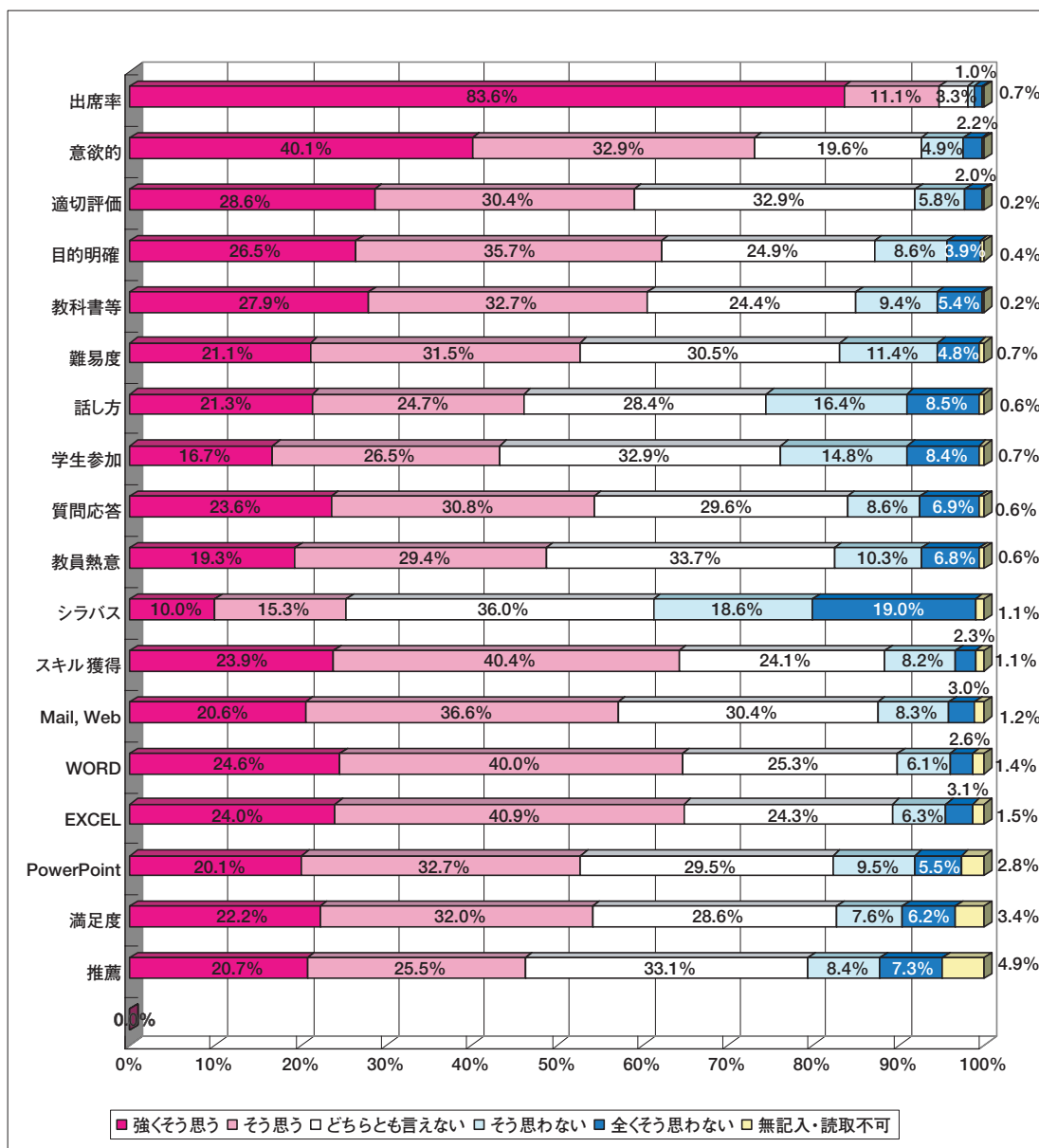


図2

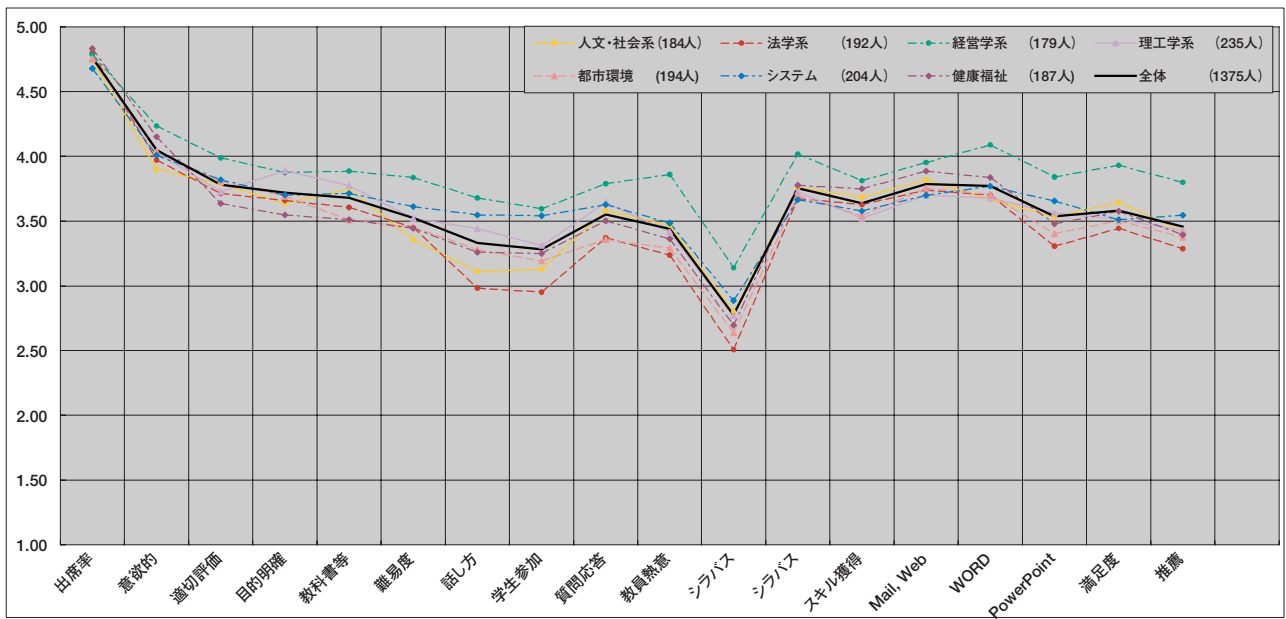


図3

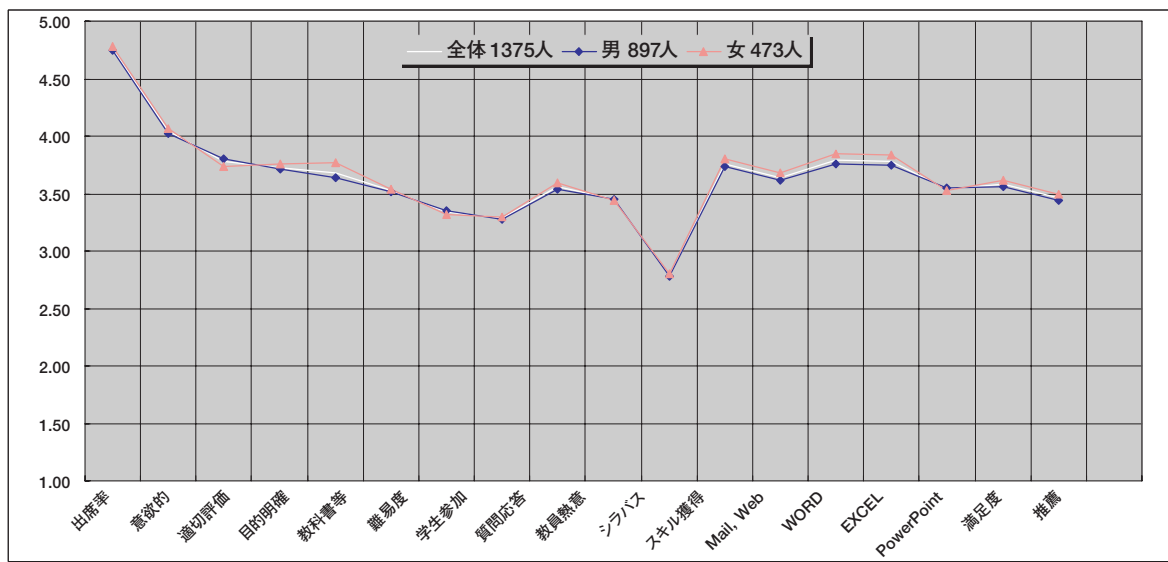


図4

図3は、各学部学系別の満足度である。これからは、経営学系が他と比べ高く評価しており、逆に法学系、人文・社会系がやや低い評価となっていることが分かる。また、図4は、男女別の満足度であるが、これを見るとどの質問項目に関しても、ほぼ同じ評価が得られていることが分かり、男女の格差はあまりみられないことが示されている。

次に図5は、授業評価アンケートの18の質問項目を観測変数として、共分散構造分析を行った結果である。これからは、学生の満足度に影響を与えているのが、因果係数の大きい順に、「教員の指導力」、「学生のコンピュータリテラシー」、「学生の意欲」となっていること

が分かる。

すなわち、学生は自分が意欲的だったから満足だと感じるよりも、良い授業を受けることができたから満足と感じることが明らかになった。したがって、教師の能力に依存している傾向が表れており、若干、自学自習の姿勢に欠けることが分かったといえる。

更に図6では、教師の能力のうち何が、学生の満足度に影響を与えているのかに焦点を当て、同様に共分散構造分析を行った。結果的として、満足度への影響力の強い順に「授業の構成能力」、「教師の意欲」、「コミュニケーション能力」となることが分かった。

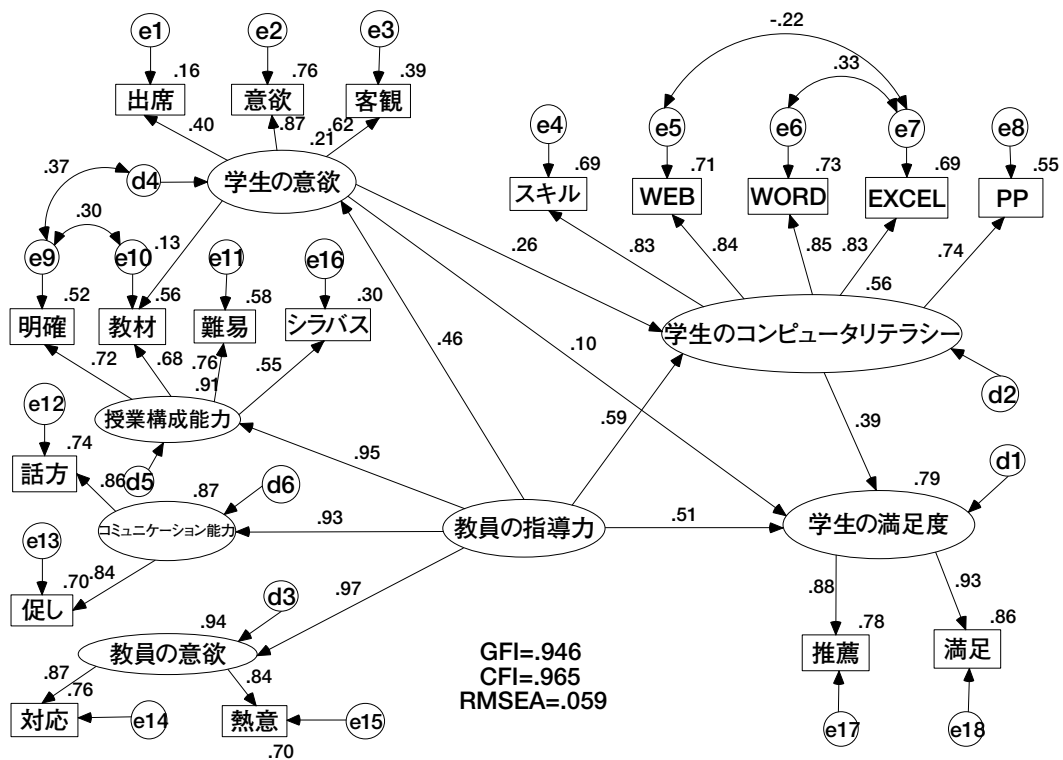


図5

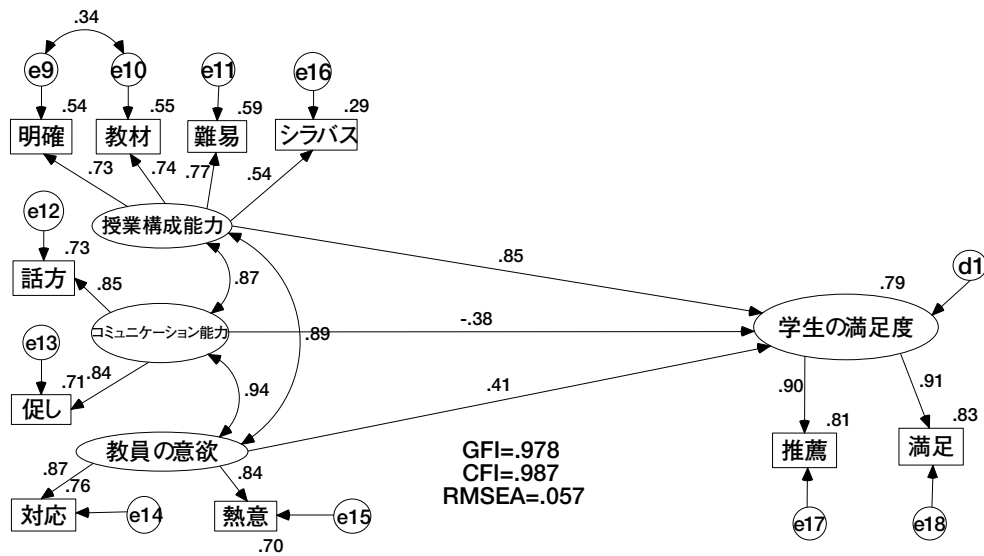


図6

このことは、学生が授業の本質を見て、評価を行っていることが分かり興味深い。ここで、前述したように情報リテラシー実践Ⅰの授業は他の教科と比べ、若干高い評価を受けているが、その満足度が、教師の授業構成力から最も影響を受けていることを考えると、現在の授業内容は比較的、肯定的に受け入れられていることが分かる。

高等学校での教科「情報」がまだ過渡期であり、ここ数年は安定的なレディネスが得られそうにないことを考えると、現在の基本的なコンピュータリテラシーの育成に焦点を当てた授業構成は重要であり、今しばらく続けて行く必要があると考えられる。

参考文献

- 片岡久明 (2003) 大学等における一般情報処理教育に関する一考察。日本教育工学会第19回全国大会論文集：37-38
- 鈴木政之 (2003) 東京女子体育大学入学生から見える高校における情報教育の7年間の変化と大学における課題。日本教育工学会第19回全国大会論文集：283-284
- 永井正洋、立花 宏、上野 淳 (2006) 大学における情報教育のレディネスに関する調査。日本教育工学会第22回全国大会講演論文集，311-312